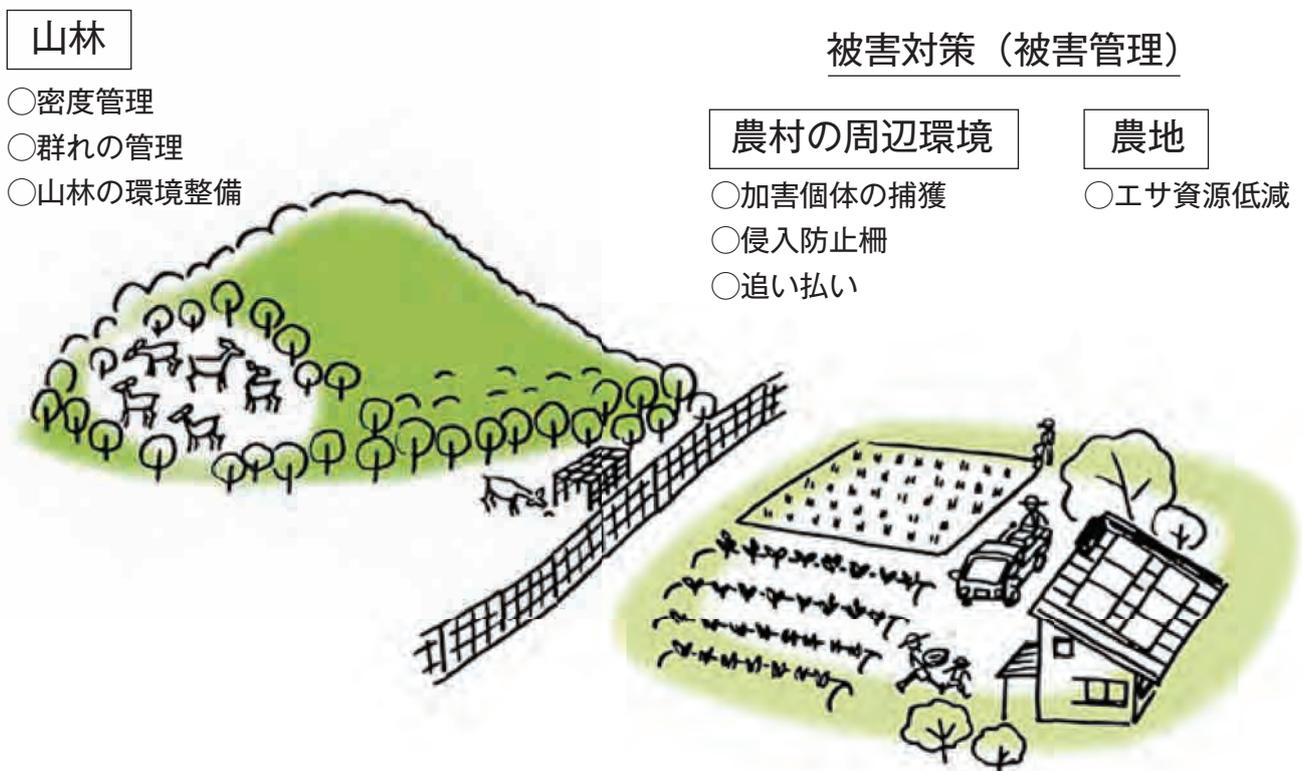


## 1.被害対策を成功させるための「鳥獣被害の原因」

そもそも、鳥獣被害がなぜ発生するのかを再度考えてみたい。野生鳥獣の生存本能に欠かさない柱は、「安全」と「食物」である。イノシシやシカに限らず、あらゆる野生鳥獣が、「安全」で「食物」のある場所を求めている。野生鳥獣から見て「安全」で「食べ物がある」魅力的な場所になっている今の農地や集落を、「危険」で「食べるができない」場所であると学習させることが重要である。それと同時に、生息地の管理や個体数の管理が必要である。鳥獣被害対策は、「個体群管理」と「侵入防止対策」と「生息環境管理」が3本柱であるが、被害対策(被害管理)は地域が主体となり、野生鳥獣の侵入を阻止しつつ、加害個体の捕獲や農村周辺の環境管理を地域ぐるみで総合的な取組として実践することが重要である(図2-2-1)。

地域を野生鳥獣からみて「危険」で「食べるができない」場所にして被害を防ぐことは、その農地や地域住民が主体的に担うべきことである。集落や農地で鳥獣被害が発生する原因を簡単にまとめる。

図2-2-1 野生動物管理の概念図



## 2. 「被害現場で見る」鳥獣被害の要因

### (1) 人が被害と思わない「エサ」がある

「ひこばえ(水田収穫後の再生株)」や収穫残渣など、住民にとっては「被害」と感じられなくても、野生鳥獣にとっては望ましい「エサ」となる物は少なくない。管理者のいない放任の柿などは今ではクマの出没原因にもなっているが、1集落到800本もの放任の柿がある集落も存在するほどである。収穫残渣の野菜くずなども、何か所もの家庭菜園が同じことをすれば、集落全体ではかなりのエサ資源となる。これらは、無意識の「餌付け」になっており、鳥獣被害の温床となっている。



写真2-2-1 「無意識の餌付け」の例(稲のひこばえ)

### (2) 「正しく」守れていない(囲えていない)

侵入防止柵で囲っているつもりでも、効果的に囲えていない事例が非常に多い。電気柵の下段の高さがイノシシに効果を発揮する20cmの高さになっていなかったり、下部に空間が空いて野生鳥獣が侵入しやすい柵であったり、柵そのものの構造的な問題ではなく、その設置方法などの問題も多く見受けられる。また、設置当初は効果があっても、適切な管理がなされないため、次第に効果を失っていく柵など、その管理体制にも問題がある。これらは共に、技術の問題ではなく、その使用方法という人の問題である。



写真2-2-2 管理が不十分な侵入防止柵の例

### (3) 隠れ場所がある

農地の周辺で野生鳥獣が「安全」と感じるのが、耕作放棄地や藪などの隠れ場所である。無論、耕作放棄地の増加は、担い手不足などの深刻な問題の帰結であるが、耕作放棄地や管理不足の林縁や藪などを放置すると、野生鳥獣が姿を人に晒すことなく農地に近づける環境を提供することになり、鳥獣被害を増加させる原因の1つになる。

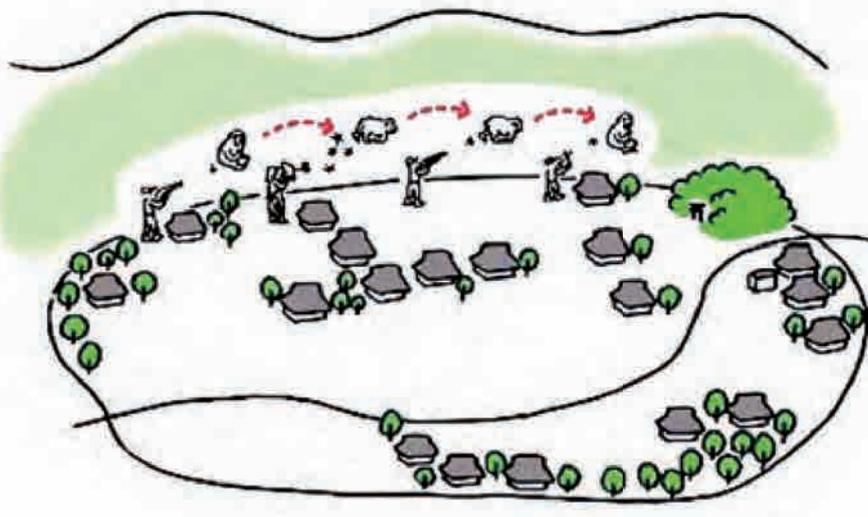


写真2-2-3 集落内の耕作放棄地

### (4) 正しく追い払っていない(サル)

サルが出没している地域で、「効果のある追い払い」ができていない地域は少ない。多くは、個人がバラバラに、自分の農地だけを守るような追い払いになっている。①農作物を食べられた時だけ追い払う(ひこばえなどを食べている時は追い払いをしない)、②追い払う人が限られている(多くの人が見て見ぬふりをしている)、③自分の農地だけ追い払いしている(自分の農地以外だと無関心で、追い払いしない)など、挙げればキリがないが、これらは効果のない追い払いの典型である。効果のない追い払いとは、サルから見れば、①人は怖い生き物であるという学習をしない、②少し隠れていれば、最終的にはエサが食べられる、という被害対策で意図する目的とは異なる学習となり、追い払いや人そのものに対して強いサルになってしまう危険性すらある(図2-2-2)。

図2-2-2 効果の少ないサルの追い払い(個々がバラバラに追い払っても効果は少ない)

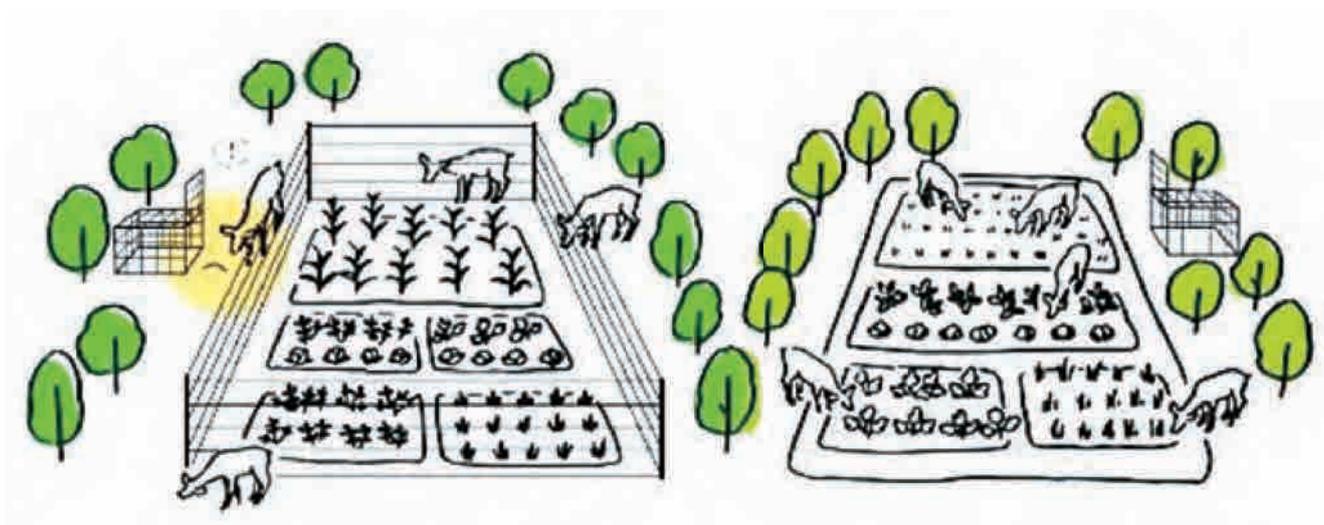


## (5) 被害軽減のための捕獲ができていない

シカ、イノシシについては個体数が増加している地域が多いことは事実であり、それらを捕獲することは非常に重要である。しかし、被害軽減のためには頭数を目標にするのではなく、農地で食べることを学習した「加害個体」を捕獲することが重要である。侵入防止柵でしっかり守り、それでも侵入してくる個体を捕獲することで、被害は軽減する。捕獲の効率を上げるためにも、侵入防止柵と併用した捕獲が重要である(図2-2-3)。

サルについては、加害個体を捕獲するのではなく、追い払いや侵入防止柵などの被害対策と合わせ、群れ単位で管理の計画を立て、①多頭群を追い払いが可能な頭数まで削減する、②行き場のない群れを除去する、といった管理が必要である(第3章参照)。しかし、多くの地域で、無計画な捕獲が進んでおり、その多くは被害軽減には繋がらず、問題をより複雑にしている可能性がある。

図2-2-3 侵入防止柵と併用した捕獲が重要



左図のように侵入防止柵があれば捕獲もしやすいが、右図のように無防備な農地だと捕獲も難しくなる

## (6) 高密度や群れ数の過多

個体数管理等が進んでいない地域では、シカが高密度化したり(図2-2-4)、サル群の群れ数も頭数も多すぎる地域も存在する。これら地域では、侵入防止柵の補修をしてもすぐに破壊され侵入されたり、群れの頭数(サル)が100頭を超え追い払い等も効果が出ないなど、通常の被害対策が成功しないことが多い。これらの地域ではシカの密度を低下させたり、群れ単位のサル群管理を進めることを優先する方が被害軽減が達成されやすい場合もあると考えられる。

図2-2-4 兵庫県のシカ被害と目撃効率(SPUE)の状況  
(兵庫県森林動物研究センター資料より)

